

病いの共同体

青山陽子著

ハンセン病は現代日本では完治するだけでなく、罹患、発症もほとんどない。だが戦後、特效薬の発見までは状況が違った。病を背負った人々は、法の力によって療養施設での暮らしを強いられた。

東京の東村山市にハンセン病国立療養所多磨全生園がある。研究者である著者は当初、様々な調査目的を掲げ、その場に向かう。だが、生きた現実は見えてこない。手にした知識と概念をひとたび手放し、観察する立場から信頼に裏打ちされた仲間になつたとき世界は変わった。題名にもある「共同体」の実相が著者の前に忽然と現れてくる。それは、人間が「われ」から私益を離れた「われわれ」に変貌する場だった。

全編を通じて描き出されるのは、試練のなかでもけつして消えない生の「誇り」である。それは語られるのではなく、しばしば体現される。ことに資料館をめぐる記述は秀逸だ。著者は十年以上にわたって人々と交わり、本書を紡ぎあげた。単に優れた研究書ではない。広く語られることのなかつた眞実の証言を無私の精神で引き受けた思想作品とも呼ぶべき一冊である。（新曜社、3600円）